

デザイン開眼

藝大生も一年のころだったか、広島のお寺の真ん前にCIE(米園文化センター)という建物が忽然と出現した。ほぼ同時期、広島東側の比

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん ろん かく え

①

治山にはABCC(原爆傷害調査委員会)ができた。

CIEには付属図書館があった。縁の赤い眼鏡をかけ、香水がほのかに漂う女性ライブラリアン(図書館士)がいて、「絵をみたい」と言ったら出してくれたのが、「アートとアート・テクチャー」という本

誌だった。近代的な建物がたくさん出ていた。

そのうち、私が芸術家の卵

だと分かって紹介された本が、ウォルター・ド・ウィン

・ティーク著の「Design This Day(邦訳・デザイン

宣言)」、レイモンド・ロー

ワイ著「Never Leave Well Enough Alone(口

量産品の美 心奮わす

金持ちのための工芸否定

インタストリアル・デザイン

の古典的名著だった。CIEの外は米軍のGIが闊歩し、ジープに乗っている。

米園文化が図書館の外外にあふれていた。藝大にもこんな本はまたなかった。工業製品

の量産品にも美が与えられる

ということを教えられ、私は

インタストリアル・デザインの

きず、戦争という形で破壊の道をたどった。敗戦後、もう

一度、外国からの近代化に乗

って国を立ち上げることにな

ったわけだが、それは自然に

求めていったことで、それで

よかったと思っている。ただ、私が選んだ美術の道

でどうするか。そこでたどり

ついたのがインタストリアル

デザインで、これで人を救

い、国を救い、民族を救う。

自らも四分五裂せず、使命感

を持ってやっていける道だと

強く感じた。同じ思いを持った男が同級

生にいた。岩崎信治。上野の

り返しの一年間で硯箱一つを

作る。こんな金持ちのための

工芸では日本は救えない。庶

民の鍋、釜、自転車などすべ

てが表現の対象だ。藝大の創

設者、岡倉天心が古きに情す

ることを考えるはずがない、

などと大言壮語していた。す



武石の友人であるCIE図書館で石田武夫氏と調べるもの

の時、本当に松陰先生が現れた。藝大の工芸科助教で来

られた小池岩太郎先生だ。先

生は結核を患って胸の手術を

し、左肩が下がって一見ひ弱

そうな印象だったが、考え方は非常に前衛的だった。

先生は英国のウィリアム・

モリスや、考現学(モノ

ルノロジオ)の今和次郎

の影響を受けていて、美

校卒業後、沖縄の工芸工

房紅房に行き、素朴な民

芸運動に身を投じた。その

の先生が「君らの話は面白い。その通りだ」と応援してくださったのだ。

図案科には、学校に顔を出さないで観光用のチラシなどを描いて金を稼いでいる連中がいた。我々は「もっと天下大義のために生きるべきだ」などと説得して歩いた。納得した者が集まって、グループが形成されていった。(インタストリアル・デザイン)

用設計の近代化は完成で

頭の中にある日展の工芸部

門は、茶を三日盛り、その様

思いをぶついていた。三三三